



『女って大変。』 働くことと生きることのワークライフバランス考』

評者・加納 尚美 茨城県立医療大学保健医療学部看護学科

紹介された本の包みを開けると、赤い地に白く大きな「女って大変。」という文字が飛び込んできた。読者に挑戦状を突きつけるような装丁である。副題は、「働くことと生きることのワークライフバランス考」と、空中に飛び回ろうとする題字を中心に留めているような小さな黒い文字であった。

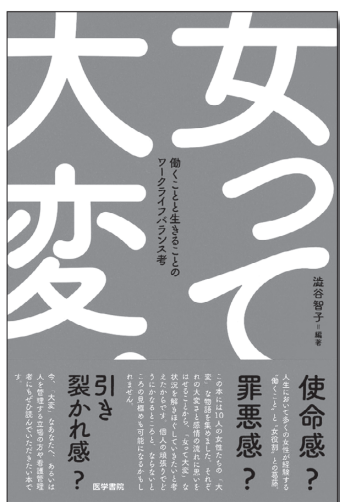
さて、この本は読者をどのような世界に導こうというのだろうか？ 女の現状に対する嘆き？ 社会制度へのプロテスタント？ 多少の懐疑心を持って読み始める。

全体は10章に分かれ、10人の筆者により構成されている。

そこには、直接、間接的に知っている方々の名前があった。各章の見出しから、おおらかに本音を語ろうとしているのが伝わってくる。例えば、「ドライな母親は楽しい!？」というように。

筆者たちの共通点は、30代以上の女性であり、仕事、子育て、介護という体験を持つ人たちである。職業は、研究者、看護師、大学教員、医師、NPO法人を立ち上げ研修事業を展開している事業者、作家などさまざまであるが、規制の枠に嵌らない方も多いようである。加えて編集者の強烈な意志が筆者たちをゆり動

多層的で複雑、 「大変」な女の現実を語る



澁谷 智子 編著

定価 1890 円(本体 1800 円+税 5%)

四六判/医学書院/2011 年

かしているのがわかる。

何人かは、「三歳児神話」と仕事の狭間で揺れ動く自分の気持ちを表現している。ときに多難な生活の中で、「自分が女であることを意識し、女であることに縛られていたのだろう」と振り返り、自分なりの母としての形を見出している。

継母としての子育て、嫁としての姑の介護に全身で向き合いながら、次第に固定化した価値観から開放され、個人として「かけがえのない家族」である相手と対峙し仕事にも深みを増す看護師たち。まさに、筆者の1人が「女の大変さは、たいてい多層的で、複雑である」と言

う現実を彼女たちは生きている。

本書の内容は、鮮やかに私の脳裏に再現されるような心地がした。同様に感じる読者はきっと多いと思う。では、「大変」の方向をどうしていけばよいのだろうか？ 絵に描いたような専業主婦生活から難病の母の介護を通じて価値観を一転させた1人の筆者は、「弱者が生きにくい社会構造の変革」者へと変貌していた。装丁の赤色は、世の中に変革を迫ろうとする象徴であったに違いない。